

5月号 ごあいさつ
With コロナ時代 — 渋沢栄一に学ぶ Vol.1 —

“大転換時代の乗り越え方” 「論語と算盤」の教え

株式会社 山西 ^{あすなろ会顧問} 代表取締役社長 西垣 洋一

近代以降の社会や経済、ビジネスは、その枠組み自体が根本的に矛盾をはらんでいます。例えば、現代の企業は、一方では「シェアや売り上げを伸ばせ」「ROE（自己資本利益率）を高めろ」と株主から求められたりします。その一方で環境や社会への貢献、SDGs（持続可能な開発目標）の実現・CSR（企業の社会的責任）を社会から求められたりもします。正に立ち立ればこちら立たずです。「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一は、こうしたいわば対局に位置する価値観にいかうまく折り合いをつけていくのかを考え、実践し、明治の時代に500社以上の企業の設立に関わりました。そして幕末に「義利合一論」（義＝倫理、利＝利益）を論じた陽明学者 山田方谷を師とする三島中州と切磋琢磨し、道徳を「論語」、経済を「算盤」と例え、「論語と算盤を一致させることが重要だ」と説きました。

渋沢栄一と「論語と算盤」が再び注目された時期は、行き過ぎた株主市場主義や利益至上主義が招いたりマンショクで世界経済が大打撃を受けた時期と重なります。又現在声高に叫ばれるSDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けての動きも、元をたどれば、自己の利益のみを追求した結果、経済格差を生み、地球環境の破壊を引き起こしたことに起因するものです。企業だけでなく社会全体を富ませようとする経済の在り方を渋沢栄一に学ぶことは、現代に生きる私たちが未来を描く時、大きな示唆を与えてくれると思います。又秩序維持と進取や革新、伝統と経済合理性、ルールと情愛、そして公益と私利といった大局的な価値を、二つながらうまく扱おうとする渋沢の思考を学ぶことは、コロナウイルスの感染拡大に苦しみ、経済か命（コロナ）の二元対立の呪縛に苦しむ私たちに勇気を与えてくれるのではないのでしょうか。以下に人生・経営哲学を、右に中国古典から「格言十則」を記します。

【論語と算盤 — 道徳経済合一説】

「論語」は、中国春秋時代の思想家・孔子の言葉を著し、人の生きる道や道徳、考え方などの書です。渋沢の思想の根底を為すものは、この論語の教えです。渋沢は、「利益を追求するのは間違いではなく、むしろ積極的にやるべきだ。それこそが国を富ませ、国を強くするものになる」と説く一方で、利益を求め過ぎて道徳心や倫理観が失われないように、実業界に論語の教えを取り入れました。

道徳経済合一説

「富をなす根源は何かと言えば、仁義道徳、正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできぬ。」

道徳

自己利益だけを追求したならば、互いに利益を奪い合って共倒れへと進む危険性も高まる。そのためにも他者利益を第一に考える道徳の規範を身に付けることが大切で誠実でなければ幸せは長続きしない。

経済

人々の生活を豊かにし、幸せをもたらすもとは経済にある。そのためには公益性を追求して経済を活性化し、発展させる必要がある。国を富ませ、人々を富ませる経済こそが、経済人に求められている。

合本主義

道徳経済合一説を理念的基盤として渋沢が唱えたのが「合本主義」です。合本主義は、広く資本を募り事業を推進する点で広義の意味で現在の株式会社制度と捉えられますが、株式会社制度が株主の利益を第一とするのに対し、渋沢の唱えた合本主義制度は、公益の利益の追求を求めます。

【士魂商才の精神】

平安の時代に菅原道真が「和魂漢才」（日本人は、日本特有の『大和魂』を基盤としなければならないが、中国には優れた賢人や長い歴史があるので、才能を養うには中国の文化も習得する必要がある。）を提唱したが、渋沢は、武士の精神と商人の才覚を併せ持つ「士魂商才」を提唱した。「武士に武士道が必要なように、商工業者にも商人道がなくはならない」。武士道のような崇高精神（士魂）は、大事だが、それだけでは国を豊かにする経済活動は進まない。士魂と共に商才も必要なのだと説いた。

渋沢栄一 『論語と算盤』 - 格言十則

- ・ 天地鬼神之道、皆惡=満盈、謙虚冲損、可=以免=害。
（天地や神霊の道とは、みな満ち足りることを憎む。
謙虚で空っぽであるなら、害から免れることができる。） - 『顔氏家訓』 -
- ・ 天道先=春後=秋、以成=歳、為=政先=令後=誅、以為=治。
（天の道は、春が先に、秋が後に来る。そして一年を形作る。
政治においては、法令を先に、刑罰を後にする。そして統治を形作る。） - 『揚子』 -
- ・ 論=農曰、霑=体、塗=足、暴=其髮膚、尽=其四肢之力、以從=事於野田野。
（農業を論じれば、次のようになる。額に汗し、足は泥まみれ、
髪はぼさぼさ、体中の力を振り絞って、農作業に従事する。） - 『国語』 -
- ・ 農不=加=工、工不=如=商、刺=繡文、不=如=倚=市門。
（農民は職人になれない。職人は商人になれない。
刺繡された布を、市場の門で売るのが最上なのだ。） - 『史記』貨殖列伝 -
- ・ 農事傷則饑之本也、女工害則寒之源也。
（農業が害を受けるのは、飢餓のもとだ。
布を織る女性の仕事を蔑ろにするのは、寒さに凍えるもとだ。） - 劉勰『新論』 -
- ・ 言行君子之枢機、枢機之發、榮辱之主。
（言行は、君子にとってもっとも重要な要素であり、
これによって榮譽を得るか恥辱をこうむるかが決まってくる。） - 『易経』 -
- ・ 発=言盈=庭、誰敢執=其咎。
（統治者がいったん口にしたことは、
いたるところで噂されている。その責めを受けるのは一体誰なのか。） - 『詩経』 -
- ・ 言不=務=多、而務=審=其所=謂。
（言葉で多くのことを言わない。
しかし、言ったことは徹底的に努力すべきだ。） - 『大戴礼記』 -
- ・ 声無=細而不=聞、行無=隱而不=明。
（声は、どんなに小さくても聞こえてしまう。
行いは、隠していてもやがて明らかになってしまう。） - 『説苑』 -
- ・ 志意修則驕=富貴、道義重則輕=王公。
（志や意志がかたければ、相手が金持ちや権力者でも屈することはない。
道義心が重ければ、相手が王族や貴族でも動ずることはない。） - 『荀子』 -